



青葉の森公園芸術文化ホール イベントレポート

当ホール主催の公演・講座の雰囲気みなさまに発信する「サポーターライターズ」の方によるレポートをお届けします。

EVENT REPORT

平成30年
2月17日[土]

開館25周年記念 第37回 青葉能

山井 綱雄

山本東次郎(人間国宝)

金春 安明(シテ方金春流八十世)

金春 憲和(シテ方金春流八十一世宗家)

山井 綱雄

出演

解説

狂言

素袍落

すおうおとし

仕舞

半蔀クセ

半蔀キリ

金春流復曲能

夕顔

都ノ女(前シテ)

夕顔の上の霊(後シテ)

写真/サポーター(カメラマン) 田邊 定行



この日の狂言は、大蔵流人間国宝であらせられる山本東次郎氏による『素袍落』、続く仕舞『半蔀』を金春流八十世金春安明氏、八十一世宗家を去年継承した金春憲和氏お二人が舞うという、なんとも贅沢な番組でした。『素袍落』は、主人の伯父にふるまわれ、酒を馬のように呑む太郎冠者、酔うにつれタガが外れ不遜な態度をとる太郎冠者、酩酊して上機嫌、日頃のうつぶんを晴らすべくご主人様を罵倒する太郎冠者にハラハラしたり。

『半蔀』は、『夕顔』に題材をとった演目で、読経に慰められ成仏する——とみえたのは全てが僧の夢のうちのできごとだった、とするもの。山の端の心も知らず行く月は上の空にて影や絶えな



京五条あたり。やんごとなき方の住むところではないけれど、素朴な雰囲気がかもす場所。雲は天を覆って垂れ込め、降る雨が荒れ果てた屋敷の軒をぬらす。旅の僧に乞われて語るは、源氏の大将に誘われ、訪れた《某の院》で果てた命。死後もさまよう闇の心をどうか清めてくださいませ。

あでやかな唐織(紅萌黄段敷瓦菊薄模様)着流しの女人は橋掛かりに消える。旅の僧が経を読む中現れたのは夕顔の上の霊。淡く紫がかつて見える白長絹大口袴のいでたち。息をのむ美しさ。静か。序の舞を舞う。動かない中に動きがある。この世のものとも思えない。このたびの「夕顔」が、もしかすると、私の一生の中で最も美しいものだったかもしれません。



清廉かつ端正。白足袋の、かかとの上あたり、足首がなまめかしい。(小面河内家重)より聞こえるは男の声。けれど、そこに、見たのは紛れもなく高貴な女人。そのたたずまいに魅せられて、すいこまれる浮遊感。あちらの世界に連れられてしまおう。

さて、和歌「山の端の」は、あなた(源氏の君)の本心も知らないまま、誘われるままについて行く私(夕顔)は、いずれ捨てられ死んでしまうのでしょうか、と読むか、私(夕顔)のこんな切ない恋心もお判りにならないで、あなた(夫である頭の中將)は去って行ってしまわれた:と読むか。あなたはどちら?

源氏十七歳、夕顔十九歳の夏のことです。

サポーター(ライターズ)も